

御意の趣有之、可申聞候間二十九日登城可仕旨、月番大和守殿より申來。各登城候處に年寄中列座、大和守演述有之候趣。今月十五日御登城被遊候處、御座の間へ被爲召、段々御懇の上意有之、其上御領國御仕立、跡々より宜敷候趣被爲聞召、一段の儀に思召候旨上意被爲蒙候。誠思召掛も無之難有思召候。此旨何も可申聞候旨、被仰下候由被申演候。御金御手傳等の儀は御披露無之候。留帳などには可差除旨被仰出候由。禮辭記之

一、室鳩巢の徳川吉宗評

舊冬駿臺へ參候仕候節、先生被仰聞は尾張様御儀に付、段々從上様御警戒有之候躰にて、只今は不相應成程の御儉約と申候。又紀國公は御國政暴虐至極の儀、外の御方に候へば、家も滅可申様子に候。依之御警戒も有之御様子に候。何かと上様御苦惱成儀共に候旨御咄被遊候。紀公は小御人數にて、早速御越候様にとの儀にて、近日御着府の旨都下取沙汰仕候。慥成儀尤承不申候。右の序に私申上候は、當上様の御事、兎角御吝嗇に御座候由一統奉申候得共、私儀は御吝嗇とは不奉存候。吝に似申様成儀も御座候得共、是

は思召御座候儀と乍憚奉存候。實は御吝嗇の氣味は無御座候と奉存候旨申上候へば、成程其通に候。少も御吝嗇の儀は無之候。繪畫の事至て御好にて、よく御繪被遊候。就夫唐畫の内、何と哉覽至極珍敷繪舊冬も出候て、拂ものにて價も廉にて御座候。入上覽被召上候様にと、御近習の面々被存、入上覽候處、殊の外御褒稱にて再遍御覽被遊、扱もほしきもの哉とひたと上意に付、殊の外廉價に御座候間、被召上候様にと御近習衆被申上候へば、此繪は左様に價廉成ものにて無之候。左様に下賤に求候ては、此繪の位落候て何にも成不申候。此方求候へば、繪の位相應に求可申事に候。然ば當時儉素を專と致し候様に、國々へ迄政令を施し候手前が、此繪に過分の金銀を費候事、わけ立不申候。近頃殘念の事に候へども、返し候へと上意にて御留不被遊候。此儀頃日の事にて慥成事に候。か様の儀中將様は御代々の御家法にて格別の事、尾張・紀國を初として天下の諸侯、似たるも無之旨先生御物語に御座候。序故申上候。乍恐奉感服御事共、惣て御政事に被用御心の御様子、中興の上様と私式は奉存候。

一、室忠三郎の儀小將遼路より鳩巢宛狀

先生彌御別條無御座候。當十五日尊書被下候て、忠三郎殿御事至て御無調法に御座候故、唯今迄御見合被遊候得共、當年は上へ御目見御願可被遊と思召候。夫前中將様御逢被遊候様に被成度、木下平三郎殿迄被仰入置候。右の通り御無調法に付、御延引に成候段も、序も候は、内匠殿・修理殿へ、物語いたし候様に被遊度候旨被仰下候。其後右の趣私宛所の御別紙も被下、内匠殿等へ相違候様に被仰下候に付、一昨十七日御兩人へ相違候處、十五日に平三郎殿・修理殿迄其段被申聞候に付、達御聽候處、何時にても御逢可被遊候間、勝手次第被參候様に可申達旨、十六日夕方被仰出に付、平三郎殿迄其段可申達と存候旨、修理殿被仰聞候。昨日平三郎殿被參、修理殿へ逢被申候間、多分此儀にて可有之候。先右の趣先達て申出候様にと内匠殿・修理殿被仰聞候て、則一昨日の趣、駿臺へ申上候。兼て藤太夫様には度々被仰聞候儀に御座候處、別て珍重可被思召候。一段の御事私儀も別て珍重奉存候。以上。

正月十九日

遼路

一、大坂表饑民救恤に付觸

從公儀御救米出候處四ヶ所。京都石。大坂石。伏見石。境五百石。米高直に付て、町中住居の及饑候者へ、爲御救米貳千石被下候事に候。有徳成者は不及申、其外の者共も志次第、右躰の者には救候様に可仕候。急度取計候者は、追て御褒美も可有之候。左様の者は、町中より奉行へ可申出者也。

丑正月

右之通今度從江戸被仰下候間、三郷町中に可相觸者也。

享保十八年丑正月廿日

淡路 日向

三郷惣年寄中

米高直に付て、町中住居の者別て難儀に及候者も可有之候間、飢候者共へ爲御救米貳千石被下之候。町の年寄世話いたし、一日に男に貳合、女に壹合の積を以相渡候筈に候。尤町の年寄、隨分正路に取計可割渡候。若私曲の儀候は、町中より奉行所へ可申出候。逐吟味可及罪科候。右可存此旨者也。